

今月の谷口雅春先生のお言葉

# しつけは、子供を抑圧するものではなく、内に宿る神性を引き出すため

子供の生命を正しい道に乗せること

生命は、すこやかにその正しい道に伸ばさしめる事が必要である。正しい道にということが肝腎である。幼児は生命にみちあふれている。彼はじつとしていられない。何かせずにはいられない。生命は「動」がその本体だからだ。その「動」の生命を正しき道に乗せる事が必要だ。正しき軌道を走るように導く事が必要だ。これが教育である。あまりに満ちあふれた生命は脱線しがちである。脱線した生命の電車は周囲を傷つけると共に自分自身を

破壊する。彼は乱暴をする、いたずらをする、破壊する。

彼にとつては、活力のはげ場がないために己むを得ずにした行為が叱られたり罰せられたりする原因となる。

しかし両親がその子供の溢れでる生命力の正しい使い方をお教えないでいながら、子供が乱暴をはたらくといって罰するならば、それは生命の完全な生長の妨げとなる。鞭は指南車ではない。それは正しき方向を決して指示さない。活力に充ちあふれてやり場のない幼児の生命は迸出(編注：ほとぼり出ること)と抑止との板挟みとなつて浪費される。

子供の悪傾向は叱責で抑止されるかも知れない。しか

しそれは積極的な生長とはならない。生命の動きを圧迫するとところに積極的な生長は起り得ない。善と真との発達は生命の圧迫から来るのではなく、正しき道に生命をのせることによって来るのだ。幼児の充ち溢れる生命を抑圧によって萎縮させるものは生命を尊ばない者のすることだ。

(新編『生命の實相』第22巻79～80頁)

子供が善くなることが

親の喜びであると分かるように

「下手だ」とか「悪い」とかいつて叱りつけて、児童の心に自己の悪い方面を印象せしめるような旧式の教育法は断然改めなければならないのである。と云って、下手のまま「これで善い」と慢心せしめるような教育法も失敗だといわなければならないのである。「非常に上手に出来たが、ここをもう少ししたら一層出来ばえがよくなるだろう。それ御覧、こうなるだろう。今度はこ

こをもう少し注意してやって御覧なさい。きつとまだまだ上手になる。この子は少しでも善くないところはすぐ改める子だから、どれだけでも上手になる子だ。将来どれだけ天才になるか、私はお前を楽しみにしているのだ」こういうふうな言葉を使つて、善くないところを改善することに歎びを見出すような誘導法を用いるのが最も好いのである。常に子供を批評するときには、確定的な言葉で、彼の将来を祝福してやり、子供の到達に親たちが望みをかけており、彼が到達することが真に親たちの喜びであることを、ハッキリと彼の心に感じられるようにしてやるが好いのである。子供は親に喜ばれることをどんなに喜ぶか！ (新編『生命の實相』第22巻162～163頁)

内在する神性を現し出すように導く

子供が過つて悪しきことをしたならば、諄々とその何故に悪しきかの理由を説いて聞かせて、かかるが故に

かかる行いが神の子たる汝には相応わしくない行いであるということを知らしめよ。かかる行いが神の子としての誇を傷つけるものである事、神の子としてはもつと他の善き行い方がある事、また真に神の子らしき善き行いは人々を喜ばし、人々を喜ばすことが又自分の真の喜びとなるものであることを知らしめよ。かくの如く言葉に現して説いて聞かすところの真理の力によって、子供のうちに宿る真理(神)を目覚めしめよ。真理は真理を招ぶのが心の法則である。罵りと強制とからは決して永遠の善きものは現れないのである。(中略)真に善き行為は、自己にやどる神、即ち自己に宿る真理と善と愛とを発見したものでなければならぬのである。そしてこれを呼び出しこれを発見せしめるものもまた、彼に接する教養系の真理と善と愛とを表わす言葉と行いとのほかにはないのである。

されば諸君よ、先ず子供に教えよ。彼自身の生命の尊さを。——人間の生命の尊さを——そこには無限力の神

が宿っていることを。展けば無限の力を発し、無限の天才をあらわし、彼自身の為のみならず、人類全体の輝きとなるものが彼自身の内に在ることを教えよ。彼をして彼が地上に生命を受けて来たのは、自分自身のためのみでないこと。人類全体の輝きを増し、人類全体の幸福を増すために神が偉大な使命を彼に与えて来たのであることを教えよ。この自覚こそ、最初の最も根本的な自覚であって、この自覚が幼時に植えつけられたものは必ず横道に外れないで、真に人類の公けな喜びのため何事かを奉仕しようと喜び励む人になるのである。

常に子供を鞭撻して、彼の善さを力説せよ。彼の美点を強調せよ。自分自身の有つ長所を自覚せしめよ。ここに子供を教養する極意があるのである。

(新編『生命の實相』第22巻172〜174頁)

